

赤穂事件と天下の法（2）

元禄15年12月14日（旧暦）、大石内蔵助等47人は、見事本懐を遂げたあと吉良邸を引き上げ、永代橋を渡って泉岳寺へと向かいます。同時に大石は、大目付仙石伯耆守のもとに討ち入りの子細を届けさせています。

赤穂浪士が泉岳寺へと凱旋する道すがら、江戸の市民達は赤穂浪士の討ち入りを讃え、歓呼の声を上げますが、その様子は、映画などでも良く出てくるシーンです。

元禄14年に起きた松の廊下での刃傷事件後、事件の原因は吉良の浅野への苛めにあったという噂が世評に流れ始めます。そうした中、市民の間には、浅野に対する同情の聲が高まると同時に、赤穂浪士が敵討ちをするだろうという期待へと繋がっていくこととなります。そのため、現実には赤穂浪士が吉良邸に討ち入るや、彼らを「義士」と呼び、その行動を武士の鑑と褒め称えます。それは見方を変えれば、民衆の、幕府という絶対的権力者に対する鬱屈した不満の表現と捉えることもできるでしょう。

一方、赤穂浪士より申し出を受けた幕府では、赤穂浪士46人（討入り後に、寺坂吉右衛門が行方不明となっています。）を細川家など4大名家に預けさせます。

将軍綱吉はもとより、柳沢吉保はじめ幕閣の方々は、赤穂浪士を如何にすべきか大変悩んだようです。

赤穂浪士の行動は徒党を組んでのテロとあって良く、当時の法に照らしても許されぬ大罪ですから、本来であれば、議論の余地なく死罪とすべきところ、幕閣内の議論は紛糾します。何故なら、世論はもとより、幕閣内にも、赤穂浪士を忠義の士として助命すべきであるとの声が強くあったからです。

そもそもの問題は、松の廊下での刃傷事件に対する幕府の対応が、拙劣であったことにあります。「喧嘩両成敗」は、当時幕府の大法でした。ですから、刃傷事件の原因が、浅野内匠頭と吉良上野介の喧嘩によるものなのか否かは、重要なことだったはずで

浅野内匠頭が吉良上野介に斬りつけるとき「此の間の遺恨覚えたるか」と叫んだといいますが、遺恨の中身は全く分かっていません。二人が殿中で喧嘩をしていたわけでもなく、吉良上野介も、遺恨に覚えはないとしているのですから、単純に「喧嘩両成敗」とはならないのは当然であり、もう少し時間を掛け、

両者から事情を聞き、慎重に判断すべきであったと思われます。にもかかわらず、十分な調査もしないまま、浅野内匠頭は即日切腹、吉良上野介はおかまいなしとしてしまいます。この結果は、後に幕府の処置は片手落ちだったという批判を招くことになり、赤穂浪士による吉良邸討ち入りを許す原因ともなりました。

大石内蔵助が、本懐を遂げた後自裁せず、幕府に届け出て幕府の処分を待ったのは、まさに、最初の幕府による処分のやり直しを求めたものといえるでしょう。

赤穂浪士の処分を巡って幕閣の意見は大揺れに揺れ、結果、評定所に審議が移されますが、評定所でも議論が紛糾します。そして出された結論は「とにかく今回はお預けのままにして、後年になって決着を付ければよい（「評定所一座存寄書」 函説忠臣蔵から）」という、何のことはない問題の先送りでした。

これに敢然と異議をとらえたのが儒学者の荻生徂徠でした。かれは、「徂徠擬律書」の中で「義は、自分を正しく律するための手段であり、法は天下の治を正しく維持するための基準である。（中略）今、46人が主人のために復讐するのは、侍としての恥を知るものである。それは、自分を正しく律する遣り方であって、それ自体は義にかなうものである。けれども、それは彼ら一党に限られたことであるから、要するに、私の論理に過ぎない。（中略）もし私的な論理を以て公の論理を害なうに任せれば、今後、天下の法は立ち行かなくなる。」と主張します（函説忠臣蔵から）。

綱吉は、この荻生徂徠の意見を取り入れ、赤穂浪士には武士としての名誉を守り、切腹を命じます。

大石等の助命を求める幕府内部や世論の大きな声に対して、情に流されず国の法を遵守することの重要性を説いた荻生徂徠は、見事というほかありません。

赤穂浪士の討ち入りに関しては、大石等への処分だけではなく、吉良方に対しても、浪士に討ち入られた際の吉良義周の仕方が不届きということで、領地を没収、義周を諏訪安芸守屋敷にお預けという処分を下しています。これによって、浅野方からすれば「喧嘩両成敗」が成立したということになるのかも知れませんが、吉良方には、割り切れぬ思いが残ったに違いありません。

赤穂事件に学ぶとすれば、一人の人間の短慮が、余りにも大きな悲劇を生み出したということです。また、何事も最初が肝心であり、初動を誤ったために、禍根の種を後世に残すことになりました。

更に、問題の先送りをしないということです。世論に流され、小手先で解決しようとするのは、決して根本的な問題の解決には繋がらないことを、赤穂事件は教えています。（塾頭 吉田 洋一）